中村　哲・尚子

Dr. Tetsu NAKAMURA
% Mission Hospital Peshawar
Peshawar, N.W.F.P
PAKISTAN

ペシャワールは再び和平交渉の前後から騒々しくなってきました。仕事の方もあちこちに戦線を拡大して，相変らず毎日グロッキーです。

連続無差別の爆破事件も再び活発化し，「和平」などとは空々しく，キナくさいにおいがたちこめています。このところ現地でめだつのは，大量の米国援助機関の進出とジャーナリストたちの徘徊です。私もアフガン人にまちがえられぬよう最近は洋服を着て出歩くようになりました。

難民は減るどころか増え続けているし，医療団体に名を借りた怪しげな機関がうろうろするし，混乱に乗じた武装集団が強盗をはたらくやら，覚めて考えればそら恐しくなることがあります。この中で平常心を保つとは，元来常識的なふつうの人間である私にとって容易なことではありません。加えて，自分のベースである筈の病棟までもが殺気だち，管理に神経をすりへらすありさまです。

ここで愚痴の一つも言いたいがその相手もなく，このところ抑うつ気味。ダメ押しのように，患者たちが病院の管理に抵抗して3月10日にはハンスト，デモ等を行い，「Dr. 中村をたてて新しいセンターを作れ」などという珍要求。病院長は名指しで批判されて逆上し，かえって患者の反応をあおるばかり。ただただ，ここは忍の一字で，私はといえば復讐されぬ程度に悪役を買ってでるのに腐心しています。

内外共に，文字通り何かの転換期だと思っています。病棟のワークショップ（靴）も一時閉鎖宣言をしました。靴作りをしていた患者が卒先して組織的な扇動を行ったからです。「Dr. 中村の敵は我らの敵」という迷惑なプロパガンダをしてかえって病棟機能を麻痺させてしまったからです。気のいい患者でしたが，心の中で泣いて追放しました。しかし，長い目でみると，これはほんのさざ波だと思われます。本当に良いサービスを組織するには，小局を大局のために捨てざるを得ないのです。悲しいことでした。情にもろい自分にはいたたまれぬ気がしました。闘争と妥協の連続です。でも，こうも重なると正直言って弱音を吐きたくなります。まず興奮せず，よい知恵を与えられるよう祈ることだと思いつまされました。

いきどおりながらも
美しいわたしであろうよ
哭きながら
哭きながら
うつくしいわたしであろうよ
（八木重吉）

所ならぬペシャワールでこのような祈りがふとわいてきます。